

(第十五回春陽会展覧会 名古屋展)

春陽会 入選画案内(上)

出品者の第一線

(32)

水谷清

今年で春陽会も名古屋展開催を三年続けてやることになりました。既にこの会を続けて観てゐらるる方々には年中行事としての親しみも出来、合せて春陽会の動向をも理解していただけることと存じます。

総括的にみれば現代リベラリズムの風潮が、洋画壇におきましては個性の尊重となり、近来ことに流派、師弟の伝統システムの定型を破つて、ただ一筋に各人の制作が個人主義的な発展を続けつつあります。これは主観的な芸道心から見ても一応心ある指導精神としてうなづけるものですが、反面絵画として基礎素養が置き去りとなり、専門的な立脚地から観て、根柢のないいたづらな自由画の氾濫となつた感があります。かかる観点から春陽会が去年以来継承しました厳選の主張として、亜流を切り捨て、個人的に各人の仕事を目立たせると同時に、素質はあつても専門的な素養のない、技術の薄弱な作品を選出しないことに致しました。今年はその主張が出品者の意気とも通じて、入選画が一層に強力な壁面を見せてゐます。

むしろこの厳選主義は、近来大展覧会が競つて大量の入選画を選び、いたづらに大を誇る方法からみれば、時流に逆行する消極性には差異ありま

せんが「厳しさ」を建前とする芸道では、かへつて積極的な必然とわれ／＼は信じてゐます。

そして今年あたりその副産物として、低調な作品を羅列して、或ひは鑑賞に堪へぬ壁面を観者に強要する愚から離れて、清潔な会場が展覧会の本意を奪還したことにあると思ひます。

◎

次に出品者の第一線にある作家を挙げて、作品と同時に説明的に批評いたしませう。

高木勇次君。去年あたりからピッチを上げて来た作家で、《切断(倉庫街所見)》はいはゆる風俗画の低調に墜おちらず、画面に動きができ爽やかな色感といひ、モダニッシュなエスプリを感じます。殊に《トイレット》は、偏へんした画因を苦もなく把握して生脈を保たしてゐる作品です。

田川勤次君は原精一、新沼杏一の二君とともに雁行して去年春陽賞を捷かち得た作家ですが、今年はその《ロメオとジュリエット》ほどには仕事張つてゐません。しかし銀灰調の色感とトーン確かさが和やか画面効果をもつて《内廓》《外容》ともに非凡な才能を語つてゐます。

原精一君は近来人物画のみを題材にあつかつて、一脈フリエツあたりに通じる果敢な作風です。《シユミーズの女》《帽子の裸婦》二作は、去年の諸作の系統を引く態度のシツかりしたもので、《野外三人》《野外二人》ともに未完成ながら研究行程にあるコンポジションの有機的な構成への躍

きな表現慾が、大々しい美観にまで展開してゐます。いづれも画面一杯に溢れた力、といつても《白いエプロン》の女の手、《静物野菜》での籠など、神経が行きわたつてゐて粗悪にはならず、三作いづれも秀れた出来栄です。

中谷泰君(名古屋)は去年から躍進した作家です。絵をよく識つてゐるといひますか、技術を心得てはゐるし、モダニヤンとしての風格をそなへた作家で、《アトリエにて》《裸婦》は小品ながら逸品です。

宮脇晴君(名古屋)は仕事が年毎に伸びて行くのは祝福すべきです。君の子供への愛情がいかに豊かであるか、画から受ける新鮮な描法が絵画の下手に墮ちず、本義に交錯して《樹上姉弟図》となり《瀧に遊ぶ》のコンポジションとなつてゐます。また《朝の海を見る》は試作と見え、版画的効果がよく出てゐます。

松本茂君(長野)は古武者ですが、一段とデッサンに鋭さが出来、色彩の冴えを見せて堂々とした動かぬ地歩を占めてゐます。

原田武夫君(名古屋)、今年はいつもの風景画から離れて、人物を取り入れた部屋の構図をあつかつてゐます。試作でせうが、外光のやうな手なれた楽しさはありませんが、部屋の雰囲気はよく出てゐます。

佐藤昌胤君(三重)、ますく画境が堅く深く進んで来ました。《牛と断崖》では、一脈東洋的なさびを含んで和やかな気韻を伝へます。自然描写の強力な選手です。

魚津良吉君(名古屋)、去年、詩情豊かな作品を見せたのに引換へ今年は

手堅い風景画《海岸の村》を見せてゐます。カッと人眼を引くやうな派手な仕事でないだけに落ついた滋味のある作風です。

山田睦三郎君は種宮脇君あたりに通ずる画風で、いつも子供をあつかつて成功してゐます。《水呑場》もその一連の仕事の展開を物語る秀作です。今年絵が幅に行つて、少し浅いうらみがあります。

稲熊賢一君(名古屋)はちよつと低調期にあるやうです。《椅子に倚る》は色感の明調が持ち味をよく生かしていますが、線の研究に不備な点が見えます。加賀孝一郎君も、少しイージーに仕事が流れて見受けられます。素養のある人ですから来年を期待していいでせう。

秋口保波君(志賀)は今年三百号の大作に独特の平面描法で《ラヂオを聞く》で気を吐いてゐますが、残念ながらあまりに大作のため、地方への運送不便で割愛しました。

高橋貞一郎君(長野)、今年小品ながら《童女像》は張りのある仕事ぶりを見せてゐます。なかなかねばりのある描法であり、人物画にも風景にも秀でた才能をもつた作家です。(完)